



Title	「共通教育科目別FD」の実施と分析
Author(s)	山成, 数明; 服部, 憲児
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2010, 6, p. 71-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5494
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「共通教育科目別FD」の実施と分析

山成 数明・服部 憲児

Implementation and Analysis of the “Subject-Wise In-Service Training Programs in General Education”

Kazuaki YAMANARI and Kenji HATTORI

Being assigned the duty of organizing systematic in-service training programs by the recent revision of the ordinances on university standards, the Osaka University Institute for Higher Education Research and Practice planned and organized the “in-service training by subject in general education” for the first time. We divided the teachers in charge of general education into about 30 groups for in-service training classes based on their subjects. Each class held an in-service training and submitted reports. This in-service training program was given a high rating by many participants. However, we have some areas of improvement for future training: ensuring the smooth operation of large classes, linking in-service training with improvements in teaching, and so on.

はじめに

大学設置基準第25条の3の規定によりFDが義務化され、「各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った組織的な取組を行うこと」が求められるようになった。これを受けて、大学教育実践センター（以下、実践センター）では、教員研修支援部門（現、FD推進部門）を中心に、大阪大学の共通教育における実効性を伴うFDについて議論を行った。その結果、授業評価アンケートの「くくり」を単位として、「共通教育科目別FD」（以下「科目別FD」）を実施することにした。

「科目別」FDは、文字通り科目別にFDを実施することにポイントがある。全体を対象とするFDとの関係で言えば、各科目の教育課題に即した問題を取り上げ、それぞれの実情に応じたFDを実施するという点で、より実効性のある活動を行うことができるという利点がある。

本稿は、「科目別FD」の実践報告を行うものである。具体的には、まず「科目別FD」の実施方法・体制等の仕組みについての紹介を行い、次に各部会で実施された科目別FDの内容・方法を、各部会から提出された報告書をもとに分析する。最後に、これら分析から明らかになった「科目別FD」の成果と課題、今後の展望について

て検討する。

1. 科目別FDの実施方法

(1) 「部会」の設定

「科目別FD」を実施するにあたって、最初に問題になったのは実施の単位・グループ分けである。専門基礎教育科目のように、ある程度輪郭の明確なものは別として、実践センターの方でも各科目群の運営実態までは十分に把握できておらず、どのような実施単位とするかが最初の課題となった。そこで思いついたのが、授業評価アンケートの「くくり」である。これをもとに実践センターとしての一応の実施グループ（部会）を設定し（下表参照）、後はそれぞれの実状に合わせて分科会（小部会）を設けて実施することとした。ただし、基礎セミナーと先端教育科目は選択科目なので、初年度は対象として含まなかった。また、外国語教育関係科目については、事前に関係者に相談したうえで、これを1つの部会とし、言語ごとに小部会を設けることとした。

実施に向けては、実践センター兼任教員を中心に各「くくり」の世話役を選定した。世話役の役目は各部会の「実施責任者」を選任することである。実施責任者が選任された後は、実施責任者会議を経てそれを中心に各部会で科目別FDを実施することとした¹⁾。

表.平成20年度「共通教育科目別FD」部会(小部会)一覧

基礎教養 1	日本語
基礎教養 2	健康・スポーツ教育科目
基礎教養 3	情報処理
現代教養	専門化学
国際教養 1	専門数学
外国語教育関係科目	専門生物学
(英語)	専門統計学
(ドイツ語)	専門物理学
(フランス語)	専門文学
(ロシア語)	専門人間科学
(中国語)	専門図学
(古典語)	専門経済学
(朝鮮語)	専門地学
(イタリア語)	専門法学

※ () は小部会

(2) 実施責任者会議の開催

実施責任者が概ね選出されたところで、科目別FDの趣旨を改めて確認し、円滑な実施に資するために、実施責任者会議を開催した(第1回:平成20年10月31日)。会議では、これまでの経緯を確認するとともに、具体的な「科目別FD」の内容とスケジュールについて議論を行った。

今回、初めての試みであったので、円滑な実施を図るために、実践センター側で各部会で行うFDの内容として以下の事柄を例示した。

- ・授業内容・方法の検討
- ・公開授業の実施
- ・授業に関する情報交換会
- ・授業改善等に関するミニ講演会
- ・シラバスの改善・充実(到達目標の設定、成績評価の方法・基準、準備学習の指示、授業内容の記載方法、など)
- ・クラスサイズの適正化
- ・共通教科書の採用・執筆
- ・成績の標準化
- ・FDの進め方・在り方に関する検討

全部会がこれら全てを実施する必要はないこと、上記例示以外の事柄についてのFD実施も大いに推奨されること、実施可能な内容について幅広く捉えることが会議で確認された。また、科目別FDを進める上で講師等の必要が生じた場合、センターが必要な対応を行うことと

した。

また、会議では科目別FDの実施スケジュールの検討も行い、2月末までに各部会ごとに「科目別FD」会議を1回は開催すること、実施された「科目別FD」については所定のフォーマットで報告すること、3月下旬に今年度の活動を総括する「第2回実施責任者会議」を開催することが決定された。

2. 科目別FD報告書の分析

科目別FDは、初年度であるにもかかわらず、全ての部会・小部会で何らかのFD活動が実施され、報告書が提出された。部会・小部会数は24、実施されたFDは30回、延べ参加人数約430名にものぼる²⁾。以下、各部会から提出された報告書について、若干の考察を行う。

(1) 科目別FDの実施内容

同じ内容であっても部会(小部会)ごとで取り上げ方や程度に差があるので、厳格に数値化するのは難しいが、成績評価に関すること、授業方法に関すること、授業内容に関することなどが、多くの部会で話し合われた。このうち、成績評価に関すること(統一テストなど試験に関することを含む)は約3分の2の部会で、授業方法に関すること(教科書に関する事を含む)は約半数の部会で、授業内容に関すること(シラバスに関する事を含む)は約3分の1の部会で何らかの形で扱われている。これらが共通教育における大きな課題となっていることが分かる。

この他に、教育条件・教育環境に関すること(クラスサイズ、受講生数、適正教員数、施設設備など)や、TAに関することを取り扱った部会も複数あった。また、FD活動の在り方自体について話し合った部会もいくつか存在した。

(2) 科目別FDの実施方法

科目別FDの実施方法で最も多かったのは、会議形式(協議、検討会、意見交換・情報交換会など)で、全体の3分の2以上を占めている(23件)。これ以外の形式としては、ミニ・シンポジウムや研究会の形式(2件)、公開授業(1件)、実務作業(1件)があった。関係教員が多い部会を中心にe-mailを活用しての協議、情報交換を行ったケースもあった(3件)。日程調整が難しい場合の工夫としてとらえたい。また、関係する部会(小部会)で合同実施したケースもあった。

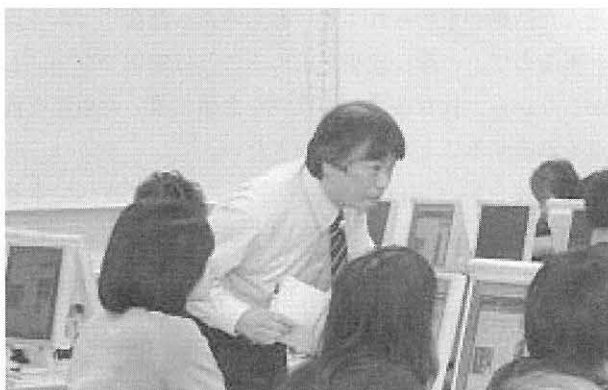
(3) 特徴的な取組

次に、各部会のFD活動のうち、特徴的な取組についていくつか紹介しておこう。

①公開授業の実施

英語小部会の科目別FDとして、公開授業が実施された。授業実施者は、共通教育賞特別賞受賞者の日野信行教授（言語文化研究科）で、授業タイトルは「リアルタイムのニュースを通して国際英語の世界に参加する」であった。空いている席に座って受講生とともに実際に授業を体験する形で行われた。公開授業終了後には、「授業趣旨説明と質疑の会」が行われ、授業実施者による授業意図などに関する説明と活発な質疑応答・意見交換が行われた³⁾。

公開授業は健康・スポーツ科目でも実施されているが、残念なことにそれが十分に広く知られてはいない。もしかしたら、他でも実施されているかもしれない。このような取組自体を広げていくと同時に、そのような活動が行われていることの周知も今後の課題の1つになるう。



②アンケートの実施

専門化学部会（「化学概論」を中心とした化学系科目全般）では、実施した科目別FDについてアンケート調査を実施した。このアンケートは、同部会で問題となっている事項（シラバス、成績分布、学生など）やFDに関する事項について問うものとなっている。前者については部会で議論されていることであるので、ここでは触れず、後者についてののみ若干紹介しておこう。

まず最初に特筆すべきは、「本日の集まりはどうでしたか」という問いに対して、参加者全員が「認識を新たにできる機会になった」という最も肯定的な選択肢を選んでいることである。満場一致で科目別FDの意義が認められている。「化学概論」と後続の講義の関係性の認識や、他の担当者の状況が聞けた点などが有益と感じる理

由となったようである。

その上で今後のFDの取組として、「今後どのような取り組みが必要だと感じられ」るかを自由記述で尋ねている。その回答としては、授業内容の交換、情報交換会、教材の紹介、公開授業など、相互の情報交換や意思疎通に関する事柄が多く出されている。また、直接会って話すことや今回の科目別FDの取組が重要とする意見が大半である。まさに組織的なFDの重要性が認識された結果となっている。

このようにFD活動自体の評価を行い、改善を図ろうとすることは重要である。とりわけスタートしたばかりの科目別FDでは、実施内容も方法も手探りであるので、このようなデータは、他の部会にも参考になるのではないかと思う。

③参加者についての工夫

担当教員以外を科目別FD活動に参加させた部会がいくつかあった。「現代教養」部会では、学部学生11名を参加させ、学生にとって魅力的な授業のあり方についての自由討議を行った。同部会から提出された報告書には、学生の意見やそれと教員の考えの異同が記載されている。そのいくつかを紹介しておこう。

- ・授業方法について、例えば、板書への評価が高かったり、授業や試験等のフィードバックを学生は強く求めていること等、教員の参考になる意見が多く出された。
- ・成績評価のバラツキは、学生からそれほど問題ではないとの意見が出されたが、教員は基準設定を望む声が多かった。
- ・履修方法の改善（ガイダンス期間の導入、履修取消期間の設定）には、学生・教員とも意見が一致した。
- ・GPA制度の導入の必要性について、学生・教員とも積極的な意見はなかった。

この部会の報告書では「授業のさまざまなやり方についての情報がやりとりされ、出席した教員には大変有意義なセミナーとなった」と結ばれている。教員同士の情報交換も有益であるが、それに加えて授業に不可欠の構成要素である学生の視点を導入することで、よりいっそう科目別FDの実効性が高まると考えられる。

この他にも、TAを参加させた部会や、次年度担当者を参加させた部会もあり、それぞれの実情・必要に応じた工夫がなされている⁴⁾。

(4) 成果の共有化と公表

以上のように、各部会ではそれぞれの実状に合わせて様々な工夫を凝らしながら、FD活動が行われた。そこで得られた知見を各自が保持するにとどまるのではなく、互いに共有化することによって、科目別FDの効果がいっそう高められる。それは、今回の成果が直接活用されるという側面と、次年度以降の各部会のFD活動に活かされる側面とがある。いずれにせよ、お互いにいわゆる「良いとこ取り」をしてもらうことにより、教育活動やFD活動自体が高められることを期待したい。

このため、第2回実施責任者会議を開催するとともに、上述の全体報告書を刊行し、概要を実践センターホームページに掲載⁵⁾して、情報と成果の共有化を図った。

このうち、第2回実施責任者会議について若干述べておこう。同会議は、科目別FDの成果の共有と実施上の課題の明確化を行うことを目的として、年度末の3月に開催した。前者については、各部会の報告と質疑応答により、FDの進め方や内容に関する貴重な情報交換の場となり、互いの刺激になったと考える。また、複数の部会で取り上げられた共通性の高い問題（教室と受講生数の問題、成績評価など）についての意見交換も行った。後者については、規模の大きい部会を中心に実施体制・連絡体制について問題提起がなされ、適切な実施単位（「くくり」か学問分野か）、実施責任者の選定方法、教員への連絡方法など、改善の必要があることが明らかになった。

3. 科目別FDの課題と展望

上にも示したように、実施アンケートを取った部会では全員が科目別FDに「参加して良かった」と回答していた。また、第2回実施責任者会議においては、成績評価などのデータをみて参加者の意識が変わったことも報告された。さらには、教科書の改訂について合意がなされるなど、具体的な成果があらわれている部会もある。科目別FDは初めての実施であったが、一定の成果が出ているように思われる。以下に示す課題を改善することで、いっそう効果的なFDとなることが期待される。

まず第1に、第2回実施責任者会議で出された実施・運営上の課題である。例えば、基礎教養や現代教養などは、取り扱っている分野も幅広く、担当教員の数も非常に多い。実施責任者であっても全教員を把握できていないわけではない。したがって、授業担当者の把握や連絡調整などは相当な負担となっている。今回は独自に教務係

の協力を得て実施した部会もあり、実施体制や連絡体制の整備を図る必要がある⁶⁾。

また、教育内容・方法に重点を置くような場合には、「基礎教養」や「現代教養」という単位よりも、「くくり」の枠を超えて、学問分野で実施した方が適切な場合も生じ得る。例えば、「基礎教養1」部会においては、「基礎教養1」全体のFDを行うとともに、一部学問分野で「くくり」の枠を超えて、国際教養科目や専門基礎教育科目と横断的な科目別FDも実施している。

担当教員が多く、学問分野としてのアイデンティティーが弱く、相互の面識も薄い部会については、FD活動の実効性を担保するために、実施責任者の意見を参考にしながら、部会の構成方法など、修正を加えていく必要があるように思われる。

第2の課題は、これらFD活動の成果の教育改善への反映である。この科目別FDに限らず、FD活動はそれ自体が目的ではなく、その成果として教育改善が起こることが求められる。上に示したように、具体的な成果として表れつつある部会もあるが、多くはそれに向かうための場が形成された段階である。2年目においては、一歩進んだ活動が求められよう。もちろん、部会による差があるもので、一律に成果を求めることは適切でない。しかしながら、教育改善への反映を念頭に置いた着実な前進を意識することは求めている。

最後に、科目別FDの今後の予定について述べて本稿を終えたい。第2回実施責任者会議での議論では、初年度の成果を報告書やホームページなどを通じて発信していくこと、科目別FDを前期と後期に異なる内容・方法で実施することなどが提案された。前者については、本稿において示してきたように、既に実行に移されている。

後者については、本稿執筆時点では、各部会に前後期とも科目別FDを開催してもらう方向で用意している。しかしながら、実施責任者の交代などもあり、全ての部会で前期と後期で異なる内容・方法で実施することは難しいかもしれない。できるだけ条件整備に努めたいと考えているが、このような要因も視野に入れて実施体制についても改善を試みたい。

註

- 1) 実際には世話役が実施責任者を担当することが多かった。
- 2) 実状に合わせて、複数の部会（小部会）で合同実施した部会や、1つの部会で複数回のFD活動を実施したところもあった。

- 3) 詳細は、大阪大学・大学教育実践センター・ホームページ
(http://www.cep.osaka-u.ac.jp/modules/fd/index.php?content_id=32) 参照。なお、この公開授業は「大学教育実践センター第1回公開授業」を兼ねて実施された。
- 4) この他、教授会に合わせてFDを実施した部会があった。
参加率が上げるための有効な工夫として位置づけられよう。
- 5) http://www.cep.osaka-u.ac.jp/uploads/class_fd_2008.pdf
- 6) この点については、平成21年度から事務職員の担当者を決めることで、一定の解決を図った。

(やまなりかずあき 大学教育実践センター

FD推進部門・教授)

(はっとりけんじ 大学教育実践センター

FD推進部門・准教授)